畑の観察 遠隔地からOK

都内業者とNEC甲府支店が実験

高齢農家のニーズ期待

通信機器の開発製造「ワイ・デー・ケー」（東京都稲城市、坂本典之社長）とNEC甲府支店（水上修一支店長）は、甲斐市内のブドウ農場で、遠隔地から農場の気象データを観測したり、作物の状態を観察できるシステムの実証実験を始めた。農家の高齢化が進む中、自宅に居ながらにして畑の状態をチェックできる環境を整えることで、農作業の負担軽減を図る狙いもある。同社は実験の結果を農家やJAなどにPRし、売り込みを図りたい考えだ。

農場には「フィールドサーバー」と呼ばれるカメラやセンサーを付属した円筒形の機器（高さ約150センチ）を設置。日射量や気温、湿度、土壌の水分・温度などを1時間おきに計測し、データは携帯電話を通じて送信。パソコンに自動的に記録される。

カメラはズーム機能付きで、360度全方位の撮影が可能。遠隔操作でブドウの房を拡大して観察したり、農場全体の様子をリアルタイムで見ることができる。電力は併設した太陽光発電パネルで賄う。

実証実験はブドウの収穫が終わる秋まで行う。農場の管理者は、カメラの映像で生育状況を確認し、現地に行かなくても消毒など手入れの時期を決めることができる。また、データを蓄積し、比較すれば、収穫や肥料をまくのに適した時期を割り出すことも可能になるという。

ワイ・デー・ケーは2年前から、同システムの取り扱いを始めた。同社の担当者は「システムを活用することで、スーパーの野菜売り場で生産地の畑を紹介することもできる。農家だけでなく、幅広く売り込みを図りたい」としている。

気象や土壌の状態を遠隔地から観測できるシステム＝甲斐市内